季刊

直江の津

◉直江津経済文化研究会◉

夏号
2005
6,7,8月

❖かみえちご❖ 上越の園芸作物

巻頭エッセイ◉このまちのこと
虫生へ帰る

◉ ひろば ◉
北海道の
鮭鱒資源保護の先駆者
[ヤソの小池]

【カメラの眼】
まちに賑(にぎ)わいを 五の市

季刊 直江の津 第18号 夏号
2005—6・7・8

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
虫生へ帰る　中戸正子　3

■上越の園芸作物
農林水産省農政局上越統計・情報センター　4

■ひろば
北海道の鮭鱒資源保護の先駆者［ヤソの小池］　19

■カメラの眼　16

■読書びと　死に臨む態度　上田三四二著　28

■くびきの郷土食　18

■東西海陸　29

■歴史の風景　30

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



春　　駒
風巻神社（三和区岡田）の大祭に奉納。三味線と太鼓の音にあわせて、女装の男衆が駒頭を持ち、二人の男衆が団扇太鼓をササラで打ち鳴らしながら踊る。（旧三和村指定文化財）

♣巻頭エッセイ
中戸正子さんのこと

旧春日村虫生岩戸生まれ
いわゆる戦没者の遺児
　新大高田分校及び上教大の事務局を定年で退職。その後2年間、上越市男女共同参画室勤務。「青苧の会」「NPO上越地域学校教育支援センター」所属。
　老若男女の個人差を越えた、ここから先は容れないぞという確執。焦燥と諦観から一見うまくいっている共生。生きる力の一つかとも考えている。

虫生へ帰る

中戸正子

私の生まれ育った虫生岩戸（むしゅういわと）は、幾多の伝説を持つ海のまちである。虫生と郷津の二集落からなるが、直ちにその位置を特定できる人は多くない。昭和四十四年に廃止された旧国鉄郷津駅或いはその後に作られたフィッシングセンターを補足してやっと理解される。最初からそう云えば早いのだが、寂れ行くこの海辺の地をいとおしむがゆえ一層かたくなに虫生岩戸を連発する。

直江津命の夫と五智国分寺の隣地で新しい生活を始めたのは三十七年前のことである。住人になるずっと以前、勤め帰りに国分寺裏門バス停で途中下車し、暮れなずむ境内に佇んだことも幾度か。晩鐘が韻を引き本堂が閉まるとあとは静寂、昇華されるような感覚であった。最初の国分寺は海に没したという説は今では否定されているが、数多な願いを背負ったまま海へという方がロマンはある。親鸞聖人の御旧跡も多く、子供の頃、鏡が池は「蜘蛛の糸（芥川龍之介）」にある極楽の池ではないかと考えたりした。キャンプの家族やサーフィンの若者で賑わっている居多ヶ浜は親鸞様が上陸された地であると知る人たちがどれ程いるやら。五智は、直江津と虫生岩戸の中間にある。

十八年前、虫生で一人暮らしていた母が逝った。「おばあちゃんはすごい人だったんだね。居なくなった途端に田畑も裏山も一面草になってしまって」と娘が感嘆した。生家はといえば「幾年ふるさと来てみれば―（自然は昔のままなのに…）―荒れたる我家に住む人絶えてなし」と唄われる『故郷の廃家』そのままの様相だった。近くに居ながら何という体たらく。子供たちの自立を機に、気の進まない夫を説得して虫生へ帰ることにした。直江津は夫からまた少し遠ざかった。

虫生岩戸はどの家からも海が見渡せる。凪の海は気持ちまで穏やかにし、冬の逆巻く波濤は奥底の深い思いを浮かび上がらせる。湾曲した海岸線を東へ辿ると、米山山地から日が昇り、直江津港の出船入船が旅情を掻き立てる。西の海に落ちた陽の残照が名立鼻を影絵のように際立たせ、北には海を隔てて大佐渡小佐渡、右手に離れて弥彦が島のように浮かぶ。南には湯殿山や岩殿山、薬師山が背後に迫り、芽吹きから初雪へと四季の移りに野鳥の声が趣を添える。直江津の祇園近くになれば夜毎海を渡って太鼓が響き、打ち上げ花火が海にも映えて月と競う。いわさきちひろの挿絵（「赤い蝋燭と人魚」）は虫生海岸でのスケッチが基になっているが、人魚さえ居そうな気になる。最近見た黒井健の絵（「月夜のバス」）も水族館あたりから虫生の間で画かれたものであろう。

伝説の頃から人が住んだという地、海に野山に幾重にも残るその踏み跡の上に今、私は住んでいる。

上越（かみえちご）の園芸作物

米作地帯の上越地域で、意外な園芸作物が作られている。
その一端と園芸作物の現状、展望について農林水産省北陸農政局
上越統計・情報センターの松矢攻一氏にお書きいただいた。





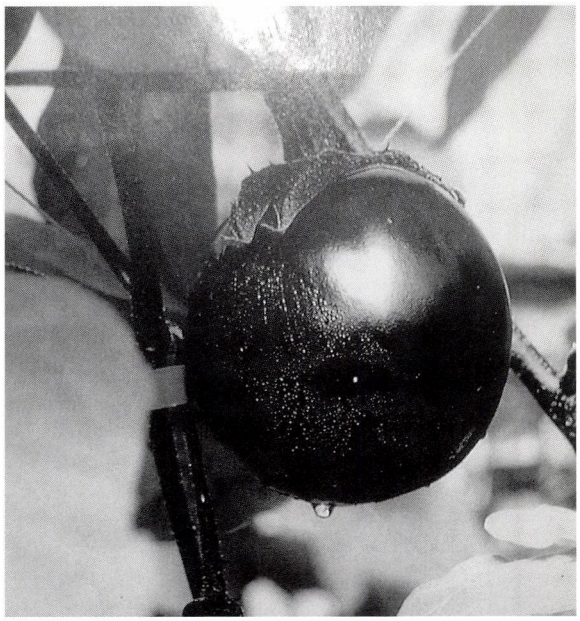






越の丸なす

■主産地　糸魚川市（旧能生町高倉集落ほか）



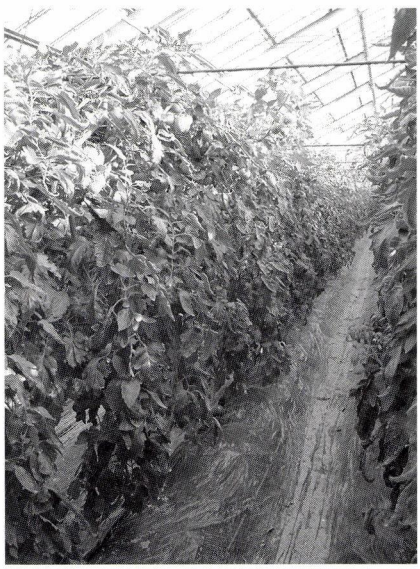
光沢ある収穫目前の丸なす

糸魚川市（旧能生町）を中心に約1・3ha（施設面積）栽培されています。栽培者の中心は「JAひすい丸なす部会」の組合員。特徴は、①直径10センチ位の大きな丸なす。②色が濃く光沢がある。③肉質が締まっているため料理の際に煮崩れしにくい。④甘味が強いことです。外見は「賀茂なす」とよく似ています。

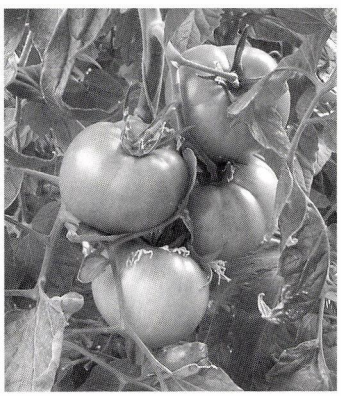
春トマト　夏秋きゅうり

■主産地
上越市（直江津地区）

春トマト、夏秋きゅうりとも上越市直江津地区を中心に約2・0ha（施設面積）栽培されています。栽培者の中心は「JAえちご上越直江津施設園芸部会（部会長　久保田隆重）」の部会員。歴史は古く、昭和38年頃雪国上越でトマトのハウス栽培が始まり、今年で40周年を迎えます。トマトの主要品種は「ハウス桃太郎」。特徴は、中心規格がLサイズの大玉で果実がしっかりし、甘熟収穫ができ、糖度が高いことです。収穫は例年3月下旬から7月中旬頃まで続き、その後きゅうりを栽培し、収穫は8月から11月まで続きます。どちらも、出荷先である地元青果市場で高い評価を得ています。



久保田園芸のトマトハウス
135mの長さがある



夏秋トマト



大洞原地区に広がるトマトの雨よけ栽培

妙高山のふもと標高約450メートルに位置する妙高市大洞原地区は、上越地域唯一といわれる野菜畑が広がっています。そこでは、火山灰で覆われた黒土と酪農家からの良質なたい肥によりつくられた、甘味たっぷりのおいしい「トマト」を味わうことができます。昼の十分な日射量と朝夕の大きな温度差が、おいしさを生み出す要素となっています。栽培面積は約2.3ha、平野部の収穫が終わる7月下旬頃から収穫が始まり10月中旬まで続きます。ここの特徴は対面販売による直売が多いことで、シーズンには直売所の前にマイカーが列をつくっています。

■主産地
妙高市　（旧妙高村　大洞原地区）

みょうが



■主産地
上越市　安塚・大島・浦川原区　妙高市（旧妙高村）　上中村新田　上越市　正善寺

JAえちご上越管内わかば地区（安塚・大島・浦川原区）で、平成12年頃から栽培がさかんに行われて、当初は栽培者30人程度で面積が1ha程度だったものが、16年度は3区で160人を超え栽培面積も5ha近くまで拡大しています。現在では、「棚畑みょうが」としてブランド化しており、地元市場の高い評価を得ています。

う め

■主産地
上越市　名立区

また、妙高市（旧妙高村）上中村新田でも平成14年から栽培されており、その面積は約1haとなっています。



管理の徹底しているみょうが畑（大島区）



出荷袋は生産者のメッセージ入り



上越市名立区の梅は上越地域で唯一の産地であり、平成4年から出荷を始めています。栽培の中心はJAえちご上越の「名立梅栽培組合」の組合員で、転作面積拡大による稲作所得減少を梅でカバーしようと平成元年に設立。

現在では27名の組合員が、肉厚で梅干しに適している「越の梅」を中心に約2haを栽培しています。

ぶどう

■主産地
上越市　浦川原区



園内にある展望台からみた様子

上越地域随一の大規模観光農園、浦川原区の「山本ぶどう園」では、「豊かな土作りに心がけ、おいしく、且つ、安全なぶどうの生産に努める！」をモットーに、生産者30戸が面積約9haの規模でぶどう栽培に取り組んでいます。数ある品種のうち大玉系に人気があり、「巨峰」の種なしが一番喜ばれているそうです。

いちじく

■主産地
上越市一円

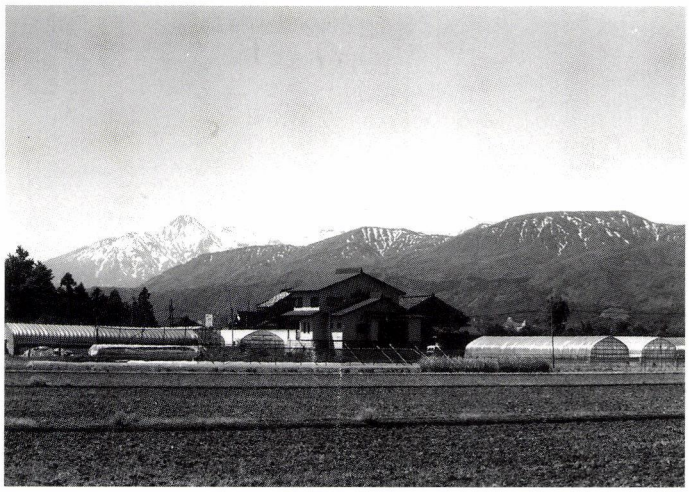
JAえちご上越いちじく部会（会長　小林忠夫）では、いちじくの産地化を目指して、水田転作等を中心に植栽を進めています。品種は「桝井ドーフィン」で、主枝を左右に1本ずつ伸ばした一文字仕立てを基本に栽培しています。

「いちじく」は食物繊維のペクチンを多く含み便秘解消に効果があります。今後も需要が見込まれ比較的栽培しやすく単価も安定していることから新規植栽が増え、平成15年の部会発足を機にさらに生産が拡大しています。昨年は、吉川区や三和区でも収穫が始まり広域的集荷販売が着々と進んでいます。



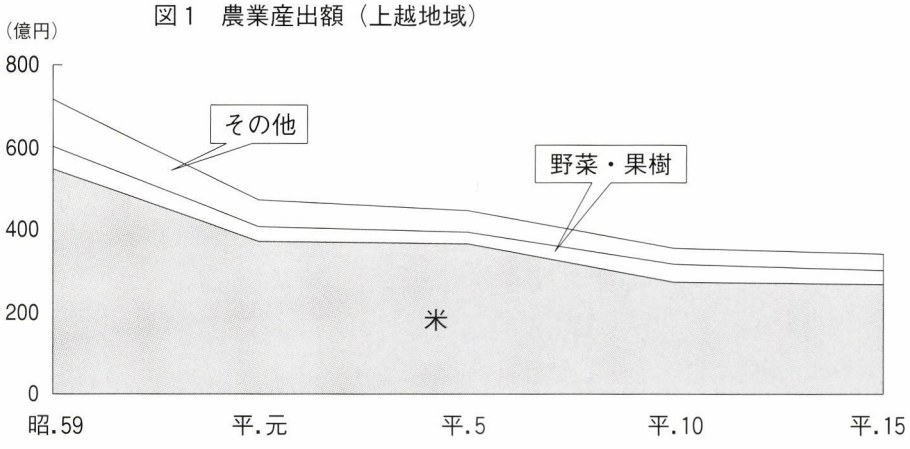
樹高が低いので作業効率がよい一文字仕立て

上越地域の園芸作物の現状



田園のなかに園芸作物用のハウスが建てられていく

図１　農業産出額（上越地域）



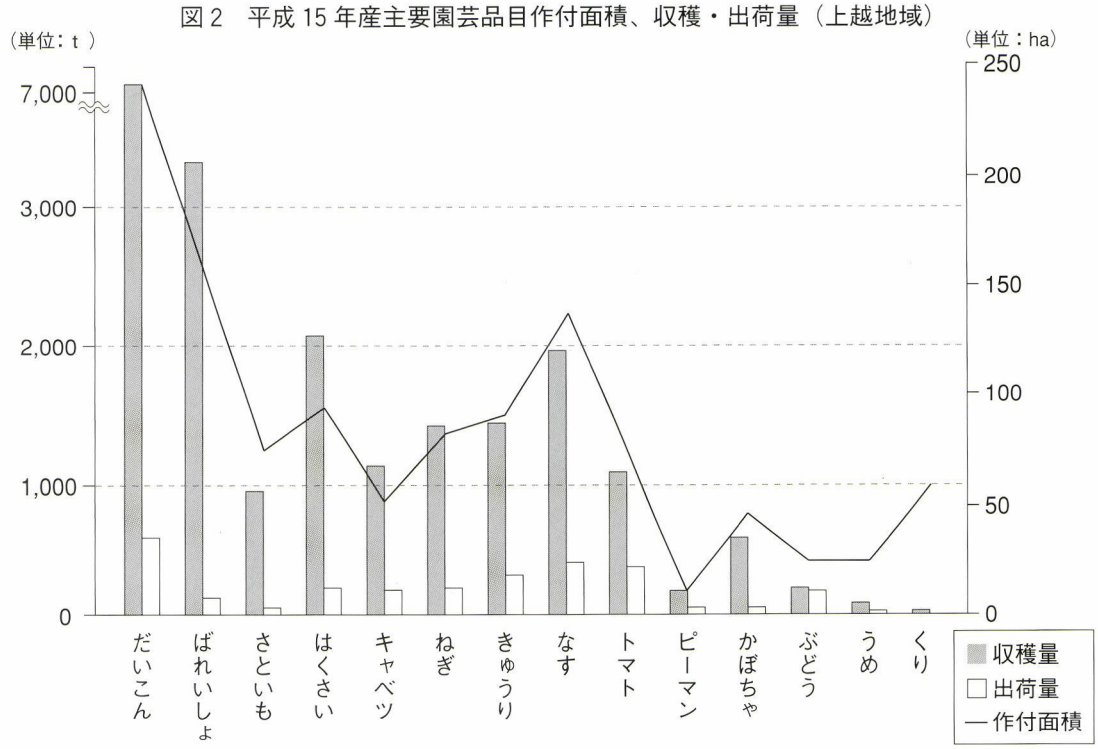
くびきの農業と園芸作物

上越地域（旧中、東、西頸城３郡）の農業は、以前から水稲を中心に栄えてきましたが、近年米価下落や消費量の減少などにより、農業産出額の減少が顕著となっています。そのようなことから、園芸作物の一層の導入が必要とされています。（図１　農業産出額）

現在、上越地域ではいたる所で野菜・果樹の栽培が行われているものの、その殆どが自給用で出荷（販売）を目的としたものは、面積ベースで１割にも達しません。また、生産動向をみると、一部品目では需要の増加により作付面積・収穫量が増加していますが、全体では残念ながら減少傾向にあります。では、どのような園芸作物が多く作付けされ収穫されているかというと「だいこん」「ばれいしょ」です。（図２　平成15年産主要園芸品目作付面積、収穫・出荷量参照）

注１　生産数量に農家の庭先価格を乗じて算出した金額です。

図２　平成 15 年産主要園芸品目作付面積、収穫・出荷量（上越地域）





広がる水田のむこうに思わぬ園芸作物の世界が――



また、地場産園芸作物の市場流通の実態を示すものとして上越青果物公設地方卸売市場取扱量（取扱高）があります。いわゆる市場出荷ですが、「トマト」が最も多く、以下「きゅうり」「なす」となっています。数量や金額が多いほど出荷（販売）を目的とした栽培がなされています。（表１　平成16年上越青果物公設地方卸売市場　地場産取扱参照）

表１　平成 16 年上越青果物公設地方卸売市場　地場産取扱（中頸城郡）

単位｛数量：t
　　｛金額：1,000 円

品　　目	数　量	金　額	品　　目	数　量	金　額
だいこん	36	2,207	かぼちゃ	10	764
はくさい	15	781	なす	62	11,414
五月菜	40	8,501	トマト	213	54,080
つまみ菜	38	11,448	ピーマン	15	2,917
キャベツ	10	881	オクラ	15	8,172
ほうれんそう	5	2,003	えだまめ	14	7,018
ねぎ	58	13,571	ばれいしょ	21	1,364
カリフラワー	12	1,805	さといも	14	2,691
みずな	11	5,336	みょうが	7	3,721
オータムポエム	14	8,760	くり	6	2,299
きゅうり	63	13,317	いちじく	4	2,254

注）数量 10 t 以上又は金額 2,000 千円以上のみ計上
資料「平成16年　上越青果物公設地方卸売市場年報」



開花も間近い齊京和教さんのユリのハウス。関西方面を中心に出荷される

注目される地場産

近年、消費者の健康志向、「食」の安全・安心の高まりから国産野菜（果樹）、地場野菜（果樹）が注目されています。その意向に応えるため、生産者は時代に応じた栽培方法を試行錯誤しながら確立しています。そのようなことから、確実に高品質なものが生産・流通されています。出荷主体は市場ですが、近年は量販店との契約栽培も増えてきています。また、直売所も営業期間及び規模は異なりますが65余り開設され、新鮮な農産物を求めて多くの人達が訪れています。

上越地域の園芸振興

新潟県では、平成16年度から「にいがた『米・園芸』の故郷づくり運動」のもと、各地域で園芸戦略プランを策し、それに基づいた各種活動を実践しています。上越地域では、水稲を主体に所得を確保してきた農家や生産組織にも園芸の導入を図るとともに、消費者に支持されるものやひとづくりを展開しています。

特に、数ある園芸品目のなかから、「ねぎ」「えだまめ」「なす」「みょうが」「オータムポエム」「いちじく」「ユリ切花」を重点品目として位置づけ、これら品目の推進をはかっています。

園芸作物で地産地消推進を

「グループ愛菜（あいさい）」の取組み



収穫前のにんじん畑と代表の池村さん

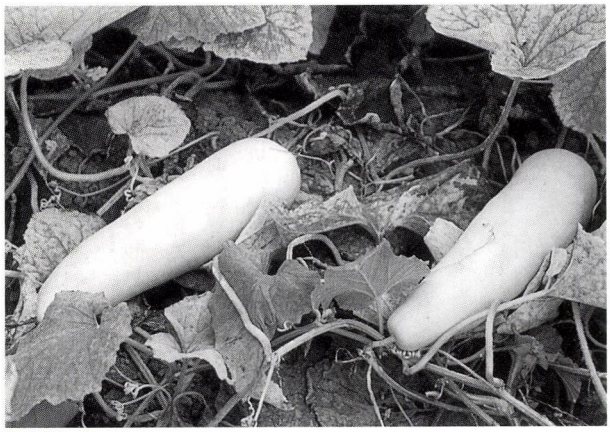
「地産地消」という言葉を最近よく耳にすると思われます。地元産の食材を地元で消費しようという考え方です。身近にとれる旬の食材は新鮮で、高い栄養価をもっています。同じ気候・自然環境の中で育ったものを食べることが、からだの理にかなっているからです。

さて、上越地域においても地産地消推進にむけた取り組みが各地で行われています。その一例が上越市三和区の「グループ愛菜」（代表池村千代子）です。同グループは20名で結成しており「多品目、少量生産」に熱心な人が多く、じゃがいも・たまねぎ等20品目以上を直接学校やデイサービス施設等へ搬入しています。「安全な野菜を子供に食べさせたい」という生産者の想いと「地場産の食材を通して旬や産地について子供に学ばせたい」学校や地域の願いが通じて実現に至りました。子供達と顔見知りになって会話ができたり、調理士からの厳しい注文もグループにとっては励みになっているようです。



消えた残したい育てたい作物

●編集部



高田シロウリ
（県農林水産部ホームページ）



「無量高土町耕地」（大野公園・高土町２丁目）

高田シロウリ（高田越瓜）

高田高土町の区画整理事業記念碑「無量高土町耕地」によれば、上杉謙信が賞味した奈良漬の瓜は、「高田シロウリ」の前身であると伝えられ、高土町の耕地が種子の原産地であると書かれている。

病害虫にも強く多収で、明治時代には新潟県指定採種地として7haで一八〇〇ℓに達したこともあるという。その耕地は宅地化により、口にすることができなくなってしまったが、この高田シロウリは、復活されてもよい作物ではないかと思われる。（参考「地方野菜大全」農文協）

「高田シロウリ」のように、栽培されなくなった事情や種子の保管が明確なものは少ない。

今、注目されているマッシュルーム栽培も、かつて高田では軍馬の糞尿を堆肥にして栽培されていたが、いつからか失われてしまった。軍隊の消滅とともに栽培されなくなったものか。



左　ボックス栽培されるワサビ（妙高市除戸）
下　ゆきとどいた管理のガラスハウスのオオバ
（妙高市小原新田）



仁野分（にのぶ）の生姜

頸城区仁野分の生姜は、文化年間に栽培され始め、筋が無くみずみずしい良品で、高田稲田口の川浦屋という店で売り出したところ、大変な評判になったという。「越後頸城郡史稿」にも「筋ナキ良品ニシテ、当郡ノ名産トナリ、善光寺、新潟、佐渡、能登マデモ輸出」され、他のものは〈筋〉多くて仁野分とは比較にならないと書いている。

〈仁野分の生姜〉は生産量が少なく、知る人ぞ知るの幻の生姜で、ほとんど市場には出回らないらしいが、〈上越ブランド〉として出荷できないものだろうか。

一方で新しい手法による農業生産も始まりつつある。

ワサビ・オオバ（青シソ）

従来、ワサビは環境に左右され栽培が非常に難しいとされて、安曇野、伊豆が独占的地位を占めていたが、「ボックス式ワサビ栽培装置」（特許）を開発した㈱フォスの技術を導入して、妙高市の農業組合法人「南越後ふるさと振興」が16年からワサビ栽培を始め、すでに茎を利用した加工食品の販売を始めている。

また同じく妙高市で、オオバ（青シソ）のガラスハウス栽培が行われている。㈱セントラルサンのミスト（霧）栽培法を導入して㈱NBファームが始めたもので、根に有機肥料を霧（ミスト）状にし、噴霧して栽培する特殊な方法である。現在三棟のハウスがあり、一棟で日産六万枚の収穫があるという。

オオバに含まれる残留農薬が懸念されるなかで、無農薬栽培のオオバは注目されている。

ヤーコン

南米アンデス原産のキク科植物で、アンデスポテトとも呼ばれる「ヤーコン」（英語名＝yaconと表記するのでヤコンと発音する人もいる）は、フラクトオリゴ糖・ポリフェノール・食物繊維・ミネラルを多量に含有し、近

アスパラ菜

中国野菜のコウサイタイ（紅菜苔）とサイシン（菜心）の交配種で、正式には、なぜか〈オータムポエム〉というかわいい名前が付けられている。

茎を茹でてマヨネーズで食べると、アスパラガスのような味わいがあるので〈アスパラ菜〉の別名があり、JA上越ではこの名前を統一ブランド名にして出荷し、特産品の一つになりつつある。(県内でも一番のトウ菜好きという上越の土地柄が、アスパラ菜を人気にしている一面もあるようだ)

ハウス管理や対病性もよく、ビタミン・ミネラルが豊富で、また花も含めて食べられるので、和洋・中華料理の食材としても栄養面でも期待されている。

上越地域では、平成二年頃から栽培が始められて年々出荷量が増えている。市内稲の古川さんは地元スーパーと契約栽培を行っており、清里区の漬物加工会社「きよさと」では全国でも珍しい〈アスパラ菜漬〉の生産販売を行っている。

アスパラ菜





左の写真はおひたし
和え物・天ぷら・パスタ
などに入れてもおいしい。

年、がん・老化防止・動脈硬化・血圧・血糖値・ダイエットなど万能健康食品として注目され、全国的に栽培が試みられている。

4、5月ごろに植付けて11月には収穫でき、上越では、名立区で栽培が進められ、うみてらす名立で加工品が販売されている。

梨とレンコンに似たみずみずしい甘味と食感があり、生でも調理しても美味しく、味噌漬、粕漬けなどに加工してもよい。





上　葉は乾燥させて健康茶にする
右　見かけはサツマイモそっくりのヤーコン

カメラの眼

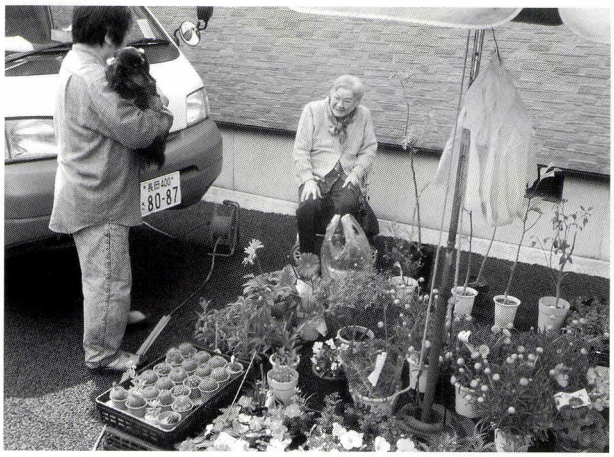
まちに賑わいを 互の市

直江津駅前の火災の跡地で0と5の日に行われている「互の市」会場が舗装整備され、五月十五日に記念のイベントが行われた。

当日は新上越市となった清里や名立などからも新鮮な食材や、駅前のホテルの軽食や弁当も売り出され、あっという間に売り切れる盛況だった。アトラクションもあいにくの風雨にも関わらず、大勢の観客で賑わった。



ブースにはあっというまに人だかりが



こんなのどかな風景も



まとめて売れていく笹もち



ジェラードもあるよ！
おばあちゃん

取材を受ける関係者





新潟のお笑い集団
「NAMARA（ナマラ）」バルーンアート



あいにくの雨になりテントのなかで観賞

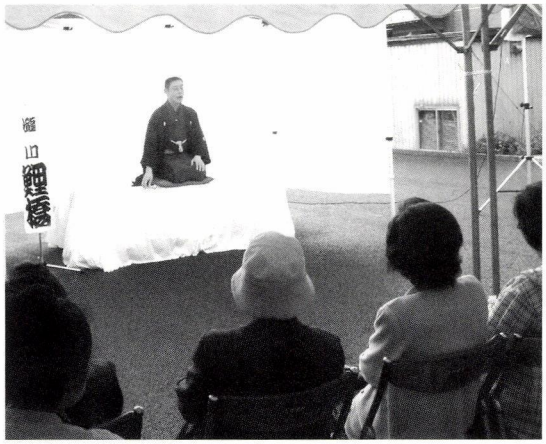




子どもたちのフリーマーケット



MSAW（エムソウ）コンサート
直江津四ツ屋・天王町出身の
ミュージシャン　新潟・長野
で活躍



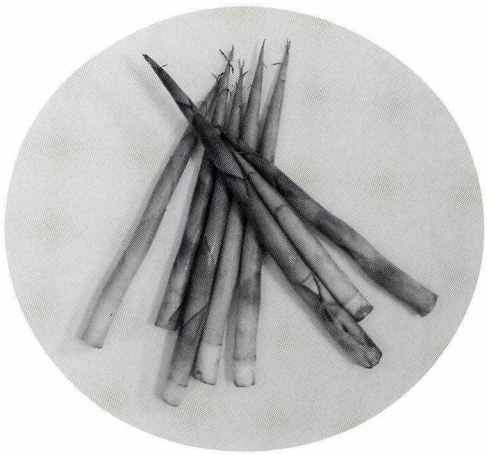
瀧川鯉橋（たきがわりきょう）の落語
直江津駅前出身　春風亭鯉昇門下　二ツ目

カブト虫も売れる

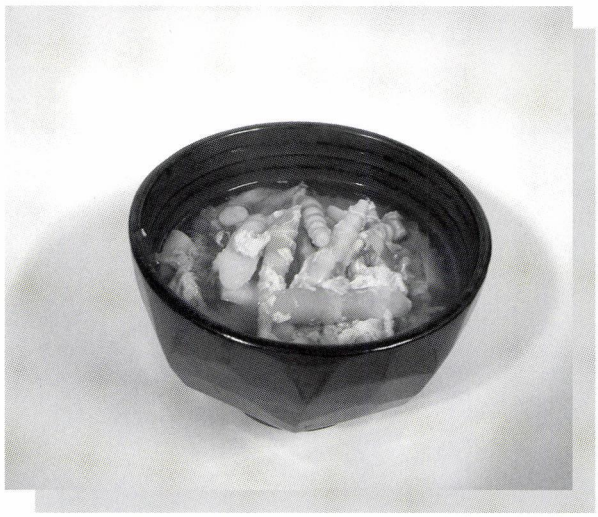


くびきの郷土食

たけのこ汁



初夏の香が立ちのぼる





朝市にはいろいろな山菜が並ぶ

雪が消え、青葉も濃くなり始めるころ、上越地方では、待ちかねたように大勢の人たちがタケノコ狩りに行く。上越ではタケノコは、同じ山菜の中でも別格の山菜のようだ。

このタケノコは、もちろん竹林（ちくりん）に生えてくる筍のことではない。山タケノコあるいは姫タケノコと呼ばれる「ネマガリタケ」のことである。

子どものころ、皮を指にはめて影絵のようにして遊んだ記憶を持つ人も多いのではないだろうか。

少し前までは親戚や知人から、タケノコ狩りのお裾分けとして届いたりしたものだが、最近の山菜ブームによる乱獲のためか、朝市などで買おうとしても、けっこう高くなってしまった。

タケノコ汁の独特の香りは、まさに初夏の香りと言えるが、味噌汁仕立てにするのは、県内では上越地域がほとんどで、県外では長野県の北信、秋田、山形で食べられている。

作り方は大体同じだが、欠かせない具材の一つに意見が大きく割れるものがある。サバかサケ缶かということである。どちらの缶詰を選ぶかは好みだが、入ると入らないでは別物の味になるから、不思議な出会いというべきか。

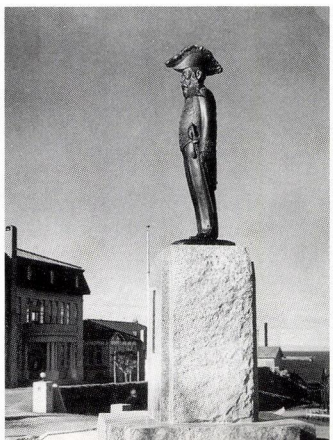
〈**作り方**〉タケノコは皮をむいて、先端の柔らかいところはそのまま、以下は節間だけ（味がよくしみる）を使う。タケノコが煮えてきたら、いずれかの缶詰を入れて味噌で味をととのえ、とき卵を回し入れて出来あがり。（但し、缶詰ではなく肉を入れたり、ジャガイモを追加するところもある。また、タケノコのみもある）

ひろば

北海道の鮭鱒資源保護の先駆者「ヤソの小池」



大礼服姿の小池仁郎銅像
昭和 14 年建立、銅像の身長 2.7m、台座 2m。この銅像は残念なことに戦時供出された。（小池昇氏提供）



小池仁郎（にろう）――。

かつて、「大潟町で一番偉くなった人」と言われ、活動の地根室では、仁郎の〈縁者〉だと言っても、俄には信じてもらえないほど〈崇敬〉され、旅した人は「神様のような人」と聞かされて驚く……。

根室公園に大礼服姿の三メートルにとどく銅像が建立され、戦時に失われたその像を昭和四十年代に至って再び建立させてしまうような根室の人たちの厚き想いは、北海道とは遠く離れ、時代も隔たった我々には計り知れないものがある。

小池仁郎の出身地である上越市大潟区（旧大潟町）下小舟津浜在住で、仁郎の本家筋に当たる小池昇氏の『鮭鱒ふ化事業の先駆者小池仁郎の生涯』（いきいき県民カレッジ講座資料）と氏の蒐集史料、『根室地方鮭鱒ふ化事業沿革第五集・小池仁郎小伝』（文中「仁郎伝」）を中心に、その人物と北海道における鮭鱒漁業・資源保護とをあわせて探ってみた。



小池仁郎　65歳

下小舟津浜に生れる

北海道鮭鱒養殖の先駆者の一人、小池仁郎は、慶応二年（一八六六）下小舟津浜村（現上越市大潟区）に小池太市郎の次男として生れた。

生家は江戸時代から醸造業を営んでいたが、明治七年に太市郎が亡くなった頃からか、経営が大変であったらしく、黒井大火で焼失した黒井小学校（現八千浦小）が同家の酒蔵を購入し、校舎として改造したという記録が残っている。

仁郎は幼くして高田藩士松下武二郎に漢文の素読を受け、後、明治十二年（一八七九）十三歳で新潟学校高田支場を卒業する。[1]

仁郎兄弟は大変な勉強家で、夜更けまで勉強し、その後、必ず兄弟で「一杯やり」、家の酒を毎晩二升も平らげたという話が残っている。

明治十一年（一八七八）、十二歳の仁郎は親戚筋にあたる小池吉平（当時丑五郎）の養子となり、明治十三年十月、十四歳で北海道へ渡ることになる。

北海道における養父吉平の経歴については不明な点も多いが、単身、根室に渡って漁業に従事していた吉平の養子にと「*白羽の矢が立てられた」のではないだろうか。

吉平は頼まれればいやとは言えず、むやみに保証人の判を捺してしまうような「*義侠肌」の人で、焦げついた債務のために家屋敷を手放してしまった。しかし、その債務がよほど大きかったとみえて、養父吉平の死後も始末がつかず、仁郎が引き継いだといわれている。

家屋敷を処分した父子は、別頭賀（べつとうが）の「*千古斧を入れざる大密林に草家を構え樵夫となり木材採取」に従事した。

この根室時代に、漢学の師松下武二郎と再会し、仁郎は再び勉学の機会を得ることになった。武二郎は、十三石三人扶持の高田藩士であったが、屯田兵[2]として明治十九年東和田屯田兵村に入植していたのである。



アイヌは必要以上の鮭は捕らない。「マクレ」と呼ばれるカギ型のモリを使った漁の帰り。
（昭和25年発行「HOKKAIDO No. 2」）

鮭鱒との出会い

別頭賀時代のある秋、父子で別頭賀川に遊び、数十尾の鮭を捕って一夜がかりで乾燥させ、翌朝、鴉に捕られないように古網に入れて軒先に吊るしておき、夕方、仕事から帰って見ると、子連れの熊と狼が数十頭、互いにけんか腰で鮭をむさぼり喰っている。その光景を目の当たりにした二人は腰を抜かさんばかりに驚いたが、吉平は枯れ枝を集めて火をかけてやっと追い払うという事件があった。

後年、仁郎はこのときのことを回顧して、

――別頭賀の山中で伐木をしていた頃は、鮭鱒がたくさん川を遡上してくるので、いくらでも捕獲することができた。しかし堀[3]につくものを未然に捕ることは、結局子孫を絶滅させることになる。どうしても人工孵化によって繁殖を図らなければならない。これは、自分としての一つの罪滅ぼしである――。

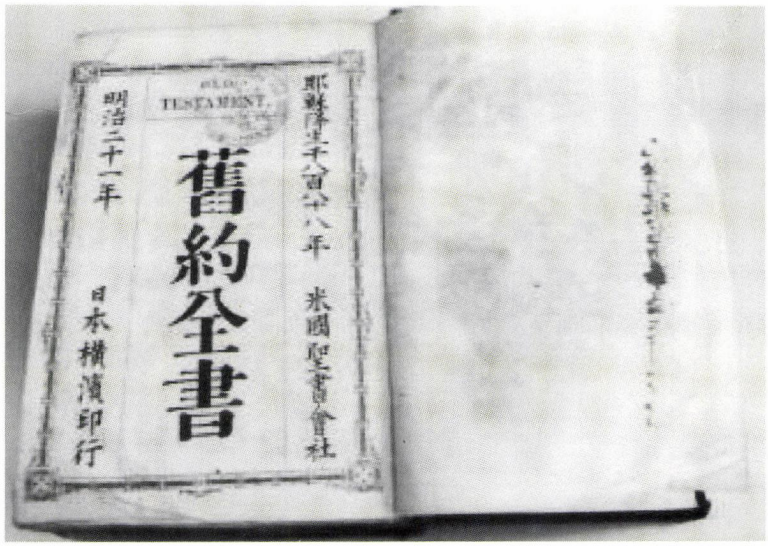
と知人に語ったという。この体験が後の鮭鱒孵化事業へと進むきっかけとなったのである。

*が印されているところは「仁郎伝」の引用。

(1) 教員養成が急務を要するとして、明治十一年三月、県立新潟学校（新潟大学）内に在学五ヶ月の速成養成機関として、小学校教授法伝習所を設置。高田分場にも定員六十名の師範学支場を併設した。伝習科は師範速成科、十二年二月に師範簡易科と改称したが七月に廃止された。

(2) 士族の授産のための移民事業として、明治七年、北海道の開拓と北方防備を目的に、日ごろは農耕に従事し、戦時には兵役に服する屯田兵令が発布され、高田士族は明治十九年現根室市和田地区に三五名、三二年現厚岸町太田地区に二七名が入植した。

(3) 堀とは「魚が産卵するため川底につくる小さなくぼみ」（広辞苑）のことで、鮭は川底に穴を掘って産卵するので「堀につく」と表現した。



仁郎が使用した「旧約聖書」。明治21年（1888）発行で、国内でも貴重な一冊といわれている。表紙裏にある「N. Koike」のサインから、「仁郎」をじろうと読まれていたのは誤りであることが分かった。（根室市ホームページ）

「ヤソの小池」に

吉平は、仁郎の向学心と将来の行く末を案じて、根室の天杉（あますぎ）菓子店で働かせることにした。当時、英語を学ぶことが大変盛んで、明治十九年（一八八六）九月、根室で布教を始めていたアメリカ人宣教師カーペンター夫妻から、仁郎も英語を学ぶことになった。

父吉平は熱心な真宗門徒であり、仁郎も漢学の師の影響でキリスト教撲滅論を主張するような人であったが、来日わずか五ヶ月で死去するカーペンターの献身的な人柄に触れ、オルガンやバイオリンを習い、賛美歌の伴奏の手伝いもするまでになった。そして、後年述懐するように「*ミイラ捕りがミイラ」になり、一人残った未亡人の手で二十年九月、二十歳の仁郎は男女九名の初の受洗者の一人となった。以来「*ヤソの小池」と人びとから呼ばれるようになったが、この入信が仁郎を生涯を通して社会奉仕の人にさせたといえる。

明治二二年十月六日、札幌で北海道禁酒会が発足し、会長伊藤一隆[4]、副会長岩井新六が和田村に遊説すると仁郎も共鳴し、根室地方の禁酒運動を主導することになった。

生家は酒造業だったが、禁酒は容易にできたようだ。

この年、天杉菓子店を辞し八木安太郎商店の帳場を任されるようになった。八木商店は昆布の仲買を手始めに、鰊・鮭・鱒漁を行う海産物商であった。特に土木工事請負の帳場の経験は、後の鮭鱒孵化場の建設に大いに役立つことになった。

明治二六年、二六歳になった仁郎は、春別（しゅんべつ）に漁場の権利を獲得して翌年から操業を開始した。また、創立間もない根室漁業組合、二八年には根室昆布組合の代議員に選出されている。

この頃の仁郎は、漁場がどんなに忙しくても、日曜日には春別から十三里の道を根室まで馬を駆って礼拝に赴き、日曜学校の子供たちの世話、礼拝、夜の集いまで一人で引き受け、オルガン演奏から祈祷までやるという熱心な信者になっていた。

春別の漁場の鰊が大漁で、祝い酒に泥酔した船頭が溺死するという事件があったとき、雇い人の飲酒は自由にさせていた自責の念にかられ「*終夜、海岸にひざまずいて、詫びの祈りを捧げた」と告白している。

三三年七月、町会議員に選出、九月には花咲町に一戸を構えて、甥の密蔵ほかの同居人と炊事の婆さんを雇い、また小型ながら汽船を持ち廻漕業を始めるなど、公私共に多忙な生活がスタートした。

教育者・政治家として

仁郎は実業家としてよりも、クリスチャンとしての人生観から一生を教育に捧げようとしたほど教育事業にも熱心で、同居人の前川[5]十郎に「*帯広の所有地に農学校を建てるつもりなので手助けしてほしい」と、札幌農学校に入ることを薦めている。これは障害があって実現しなかったが、後に帯広と本別に

女学校を建てている。

また、色彩の画家として知られた青山義雄[6]のフランス留学の援助をするなど、芸術に対しても理解を持っていた。

一方、明治三三年（一九〇〇）、三四歳で町会議員に選出されて以来、三七年には道議会議員、大正四年（一九一五）からは、根室開拓の祖の一人、柳田藤吉の後継者として衆議院議員に進出している。

昭和六年（一九三一）、第二次若槻内閣の逓信政務次官に就任し、十一月十七日の前島記念館落成式にあわせて、五十年ぶりに故郷に錦を飾り、時局講演会や盛大な歓迎会が行われた。

落成式当日、仁郎は小泉[7]又次郎逓信大臣の祝辞を代読し、祝宴の来賓代表の挨拶では、同郷の人間として、また逓信事業に携わる立場で列席できる光栄と奇縁を感慨深く述べている。また地元の「高田新聞」「高田日報」の両紙は、記念館落成の記事とともに、仁郎の履歴についても詳しく伝えている。

「育てる」漁業へ

北海道の鮭は漁具などの発達により、河口水域の産卵漁の乱獲によって資源が減少し、明治二一年（一八八八）千歳川に官営の千歳中央孵化場が建設されて本格的な増殖事業が始まった。

明治四二年、根室地方の水産振興のため、



アイヌの子供たちに囲まれて写真に収まる仁郎。（「ねむろむかしがたりNo.4」より）



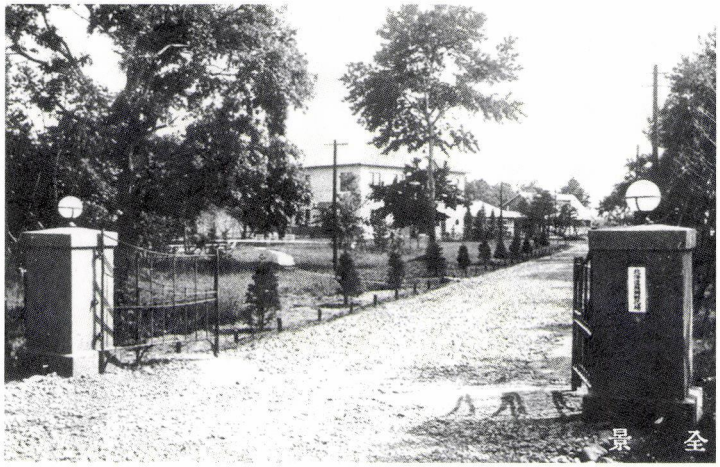
前島記念館落成式の仁郎
後列中央のひげの人、左隣は仁郎夫人。（前島記念館所蔵）

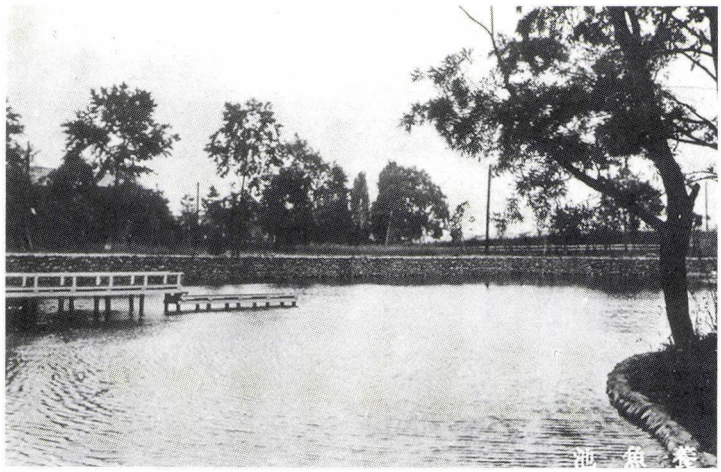
（4）北海道開拓使（札幌農学校）の第一期卒業生。北海道庁初代水産課長。明治二一年、烏柵舞（うさくまい）村に人工孵化場を建設。二九年、インデアン水車と呼ばれる鮭の捕魚車を導入。北海道水産会の設立、鮭、鰊粕などの加工方法なども指導。明治三三年、農学校の師であったエドウィン・ダンに招かれ、インターナショナル石油会社（旧直江津に建設）の経理部長となる。日本石油に移籍後日石社史の編纂に携わる。「あしながおじさん」などを翻訳した英文学者松本恵子の父。日本のキリスト教における禁酒運動の先がけ。

（5）北海道大学の教授となる

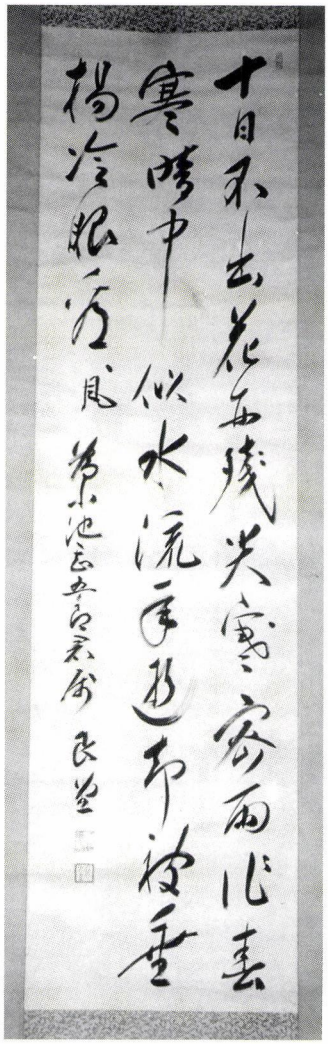
（6）神奈川県出身。明治三八年、海軍省勤務の父の転勤で根室へ。大正十年、二八歳でフランスに留学、マチスに見出され、色彩の画家と呼ばれた。

（7）小泉純一郎首相の祖父





養魚池
昭和11年千歳鮭鱒孵化場を北海道鮭鱒孵化場と改称して札幌に移転した。（記念はがきより）



仁郎の書（小池昇氏所蔵）
十日不出花刑(カ)残　尖寒密両作春寒
晴中似水流手遊　却被垂柳冷眼発
風（題名）　為小池甚五郎君属　良（艮）堂

根室周辺の水産関係組合を合併して根室外四郡水産組合と改組し、仁郎は組合長に就任して鮭鱒養殖事業に熱心取り組み始めた。

仁郎は「漁場の親方・ヤソの小池」呼ばれたり、自称もしていたが、この頃から「*我々漁師」という表現をしばしば用いるようになっていた。

北海道庁に寄付した西別鮭人口孵化場をはじめ、組合では標津（しべつ）・羅臼・伊茶仁（いちゃに）に直営の孵化場を持っていたが、羅臼の施設を拡大し、河川曳網漁業を中止させるために漁業権を買収し、また、火災に遭った標津孵化場を自ら現場監督に当たって再建、ここでも曳網漁業を全て休業させている。さらに伊茶仁川では五年間の天然孵化、当幌川（とうほろ）には数十人の密漁監視員を置いて天然産卵の保護を行っている。

一方で新しい孵化場を求めて、アイヌを道案内に根室の原野を歩き、「原野のことはポロニシパに聞け」とまで言われるようになった。

この間の大正七年、当幌川に孵化場を求めて調査し、計根別（けねべつ）に孵化場を発見して建設している。

仁郎はアイヌの面倒もよく見、親しくしていたので、ポロニシパ（大旦那さま）と呼ばれるまでになっていたのである。

昭和九年（一九三四）孵化事業が国営化され全道的組織になると、その促進を図るため、当時道内あった三八の民営孵化場の経営者を説得して国に寄付させ、自ら北海道鮭鱒保護協会長に就任した。

昭和十一年（一九三六）一月、上京して国会に臨む一方、各方面に奔走していたが、風





再建された胸像
旧銅像の台座と碑文が残っており、昭和43年「故小池仁郎銅像復元の協議会」により再建された。題字の書は佐藤栄作元首相
（小池昇氏提供）

邪を押しての無理がたたり、二四日午後、下落合の自宅で狭心症の発作のため帰らぬ人となった。

東京での葬儀は二七日、立憲民政党の俵[8]孫一を委員長に青山斎場においてキリスト教で行われ、三月三一日、六百余の会葬者によって根室町民葬が行われた。

享年七十。

(8) 浜口内閣の商工相。冶金学のパイオニア俵国一の兄。

■参考資料
「鮭鱒ふ化事業の先駆者小池仁郎の生涯」（いきいき県民カレッジ講座資料）平成十六年　小池昇
「根室地方鮭鱒ふ化事業沿革第五集・小池仁郎小伝」昭和三五年　北海道鮭鱒保護協力会根室支部編
「北洋のサケ・マスふ化事業の先駆者小池仁郎」平成十六年　五十嵐雅樹
「小池仁郎翁」（ねむろむかしがたり4）根室市博物館開設準備室
「サケよ、豊平川をのぼれ」吉崎昌一著　草思社
「大潟町史」大潟町
「上越市史・通史編・近代」上越市
「高田市史」高田市
「新潟県教育史夜話・頸城編」新潟県社会科教育研究会編
「高田摘史」村山和夫著　北越出版
根室市ホームページ

■協力
小池昇
佐藤敏夫
樋口嘉和

鱒の保護



マクレで漁をするアイヌ

鮭は日本列島の中部から東の海の幸であり、江戸時代には藩財政の一端を担っていたところも多く、そのため資源保護が早くから行われていた。村上藩が宝暦年間に川の一部を仕切って産卵場を設け、孵化した稚魚の保護を行ったのが、その始まりだといわれている。その後、三面川では産卵用の「種川」を開設し、この方法は各地に伝えられた。

鈴木牧之の『北越雪譜』には、捕獲した鮞(はらこ)を人工的に受精させ川の砂利と共に「鮭なき国の海に通ずる」川に戻してやるという、人工孵化の方法が提案されているが、この方法は実際には明治に至ってからのことになる。

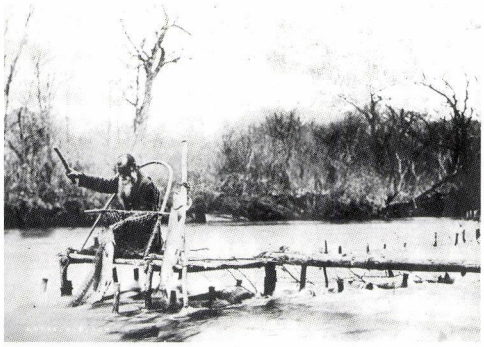
これに対して、北海道は稲作が行われなかったため、アイヌが自然の恵みとして捕獲してきた鮭を、〈和人〉が一方的な収奪の対象とし、ことに北前船が発達して航海日数が短くなると、正月魚として甘塩の「荒巻」が現れ、樽詰の筋子も出荷されるようになり、急激な漁獲量の減少が始まった。明治に至って政府は資源保護と称して、真先にアイヌの生活維持のための「テシ」や「ウライ」と呼ばれるささやかな漁具を禁止したのである。

北海道の本格的な資源保護は明治十五年代からで、鮭鱒が遡上する河川に監視人を置いて、天然産卵のための〈種川制〉を敷き、また産卵させる〈蕃殖場〉と呼ばれる区画の整備を行っている。

人工孵化は明治十一年（一八七八）、お雇い外国人トリートによって行われたが、本格的に開始されたのは、明治二一年、アメリカで孵化技術を学んできた伊藤一隆によってである。彼は、初めて鮭の人工孵化に成功したアトキンスのアトキンス式孵化器を導入し、三〇〇万粒を採卵して翌年二月に放流した。四年後の二五年十二月、伊藤の後任藤村信吉が目の当たりにしたのは「尾鼻相連なりて来ること昼夜を差別せず」遡上してくる鮭であった。以来、人工孵化事業が普及して行くことになった。

北洋の鮭鱒漁業の本格化は明治四〇年（一九〇七）、函館出身の平塚常次郎と三条（新潟県）出身の堤清六の協力によって宝寿丸が三万尾の鮭を揚げたことに始まり、大正十年（一九二一）の日露漁業㈱（現㈱ニチロ）設立へと発展していく。

北洋の流し網の導入は、昭和六年（一九三一）道庁の依頼で富山県の漁師が始めた。



「ウライ」と呼ばれる簗(やな)でオビラメ（イトウ）を捕るアイヌ

武家屋敷に集う









絵はがきも売り出された
画・樋口キミヨ

〈まちの活生化〉などと、大上段に振りかざすことなく、自分の好きなまちで楽しいことをやろうという女性達のグループ「あわゆき組」が、お花見にあわせて、旧武家屋敷を舞台に甘味処を開催、静かな武家屋敷の佇まいのなかで、訪れた人たちは時代を超えたひと時を楽しんだ。

会場になった「無量庵」は、高田藩の漢学者の屋敷と伝えられているが、詳しいことは分かっていない。

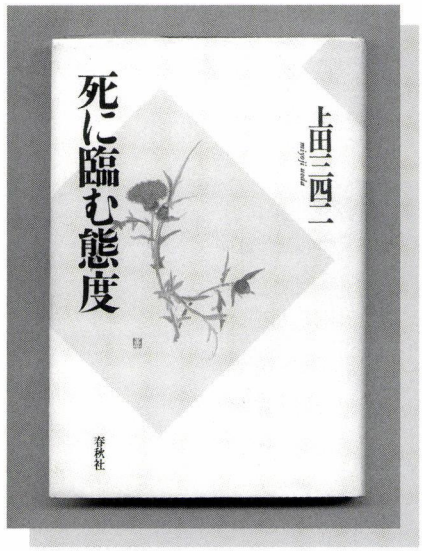
「無量庵」という号は、憲政の神様と言われた咢堂・尾崎行雄の命名になるものである。咢堂は大政翼賛会を批判し、東条内閣を「独裁政治」と非難して以来、官憲の監視が厳しくなり、池の平でスキー旅館を経営する佐々木久治の楽山荘内に、しばしば滞在するようになった。

どのような縁で「無量庵」の命名者になったのかは不明であるが、彼は「救世軍」の名付け親でもわかるように、敬虔なクリスチャンであり、無量庵の近くに聖公会教会があるので、礼拝に訪れたというような縁があったのかもしれない。

隅々まで手入が行き届いた建物は、個人のお宅ではあるが、まちの財産のひとつとして伝えていきたいものである。

'04関由有子調査／「妙高高原ロッジ物語」星野達雄著

■読書びと



死に臨む態度

上田三四二著

春秋社刊
一八〇〇円（新装版）

遅く来た春に誘われ、細君と桜狩に出かけた。風巻神社裏山の神代桜、信州牟礼の大山桜、袖之山の枝垂桜を巡る。常の年にはなく散る花に心惹かれたのも、我が周りに健やかならざりし事どもの続いたからかも知れない。

虚空を背に咲く桜の下で、『祝婚』（新潮社・一九八九）という短編を想った。医家であり、中世隠者の評釈で知られる歌人、上田三四二（うえだみよじ）が形見に遺した珠玉の佳品。二度目の癌の転移で定命を悟る主人公は、文学の世界の外に永く孤独を囲った妻を伴い、遠縁の娘の婚儀と恩師への永訣のため若き日の思い出の地、京都へ旅する。上洛の車窓、回想の曼殊院、東山通への独歩、風景は桜花の天蓋を連ねる。私小説作家でもある作者の、此岸の人への最後の賜であった。

上田三四二は一九二三年兵庫県小野市に生まれる。京都大学医学部を卒業、在学中より作歌を始め、四九年歌誌『新月』に入会した。五五年に処女歌集『黙契』を出版、六一年『斉藤茂吉論』で群像新人賞を受賞、以後多くの文芸評論を発表する。六六年、四十三歳のとき必死の結腸癌を病み生涯の転機となる。十八年後の八四年前立腺腫瘍を摘除するも翌年再発。八八年『祝婚』で川端康成文学賞を受ける。一九八九年、改元の翌日六十五歳でこの世を去った。

ちる花は數かぎりなしことごとく
光をひきて谷にゆくかも　『湧井』

胸を病んだのを期に結核療養所での勤務医の道を選び、短歌と評論にすべてを懸けた青年期から、大患後の来し方の、様々な出逢いを綴り芸術選奨を受けた連作私小説『惜身命（しゃくしんみょう）』（文藝春秋・一九八四）は、師である山本牧彦の「おのづから惜身命の偈となりてひぐらしぞ啼く樟の木むらに」をキーワードにしている。正法眼蔵の「不惜身命但惜身命」を、現世愛染は凡夫の常、詩歌の源と観じ切った上田の代表作である。

『死に臨む態度』は、上田が生前に出版する意図をもってまとめ置いた原稿を素に一九九三年上梓された最後のエッセイ集である。

冒頭の『病後の読書』に、上田三四二という一人の男の一生に感ずるところ多き理由が語り尽されている様に思う。転移手術で癌研に入院する前に、自著の校訂や未刊の創作集、評論集、歌集の編集を済ませ、〈約束の講演を断り、選歌を断り、文章を断り、選考委員を断る〉と〈譬えようもない身の軽さである。心は空になった。そして私にしなければならないことは何もなかった。死を待つよりほかに〉と記す。

「ただ、読まずして別れてゆく本にだけは、知ることなしに過ぎてゆく女への思いもかくやとばかりあらぬ連想を誘う、愛惜の念があった。」

そして、ゆるやかに与えられたその後四年のときを、『祝婚』に描いた閑雅に至りつき悠揚として幽明境を異にした。

最後の歌集『照径以後』集中より「山色渓声」

谷ふかく入りきておもふ癒ゆるなき
身は在りてひと世（よ）の妻をともなふ

清流を吹きくる風が葉をならす
青葉よろこぶ声とおもはん

上田は生涯、西行、良寛、道元、兼好法師ら隠者の系譜に連なる詩歌と〈殺なき世界〉の思想、魂の浄化と死生観を研究したが、又幻のごときエロスの世界を内に秘めた作家の貌をもつ。

八組の世に認められない男女の形を描いた連作短編集『花衣』（講談社・一九八二）、日経でWが書きなぐる不倫ポルノと千里を隔て、〈うつしみ〉の世界を端正な言葉で紡ぎだしている。

おぼろ夜とわれはおもいきあたたかき
うつしみ抱けばうつしみの香や　『湧井』

吾が愛する上田三四二の小宇宙。全歌集はもちろん、『死に臨む態度』と『花衣』他の講談社の文庫は入手可能なので一読を薦めたい。（臣）

東海 西陸



絵暦江戸の365日より

石花菜――ロマンチックな雰囲気を漂わせる漢字だが「テングサ」と書いては味もそっけもない。普通は「天草」と表記している。

石花菜を煮詰めて固めたものを「瓊脂（けいし）」と言って中国では古くから食膳に上っていた。「瓊」は美しい玉のことで、広くは美しいものをさすと辞書にある。「瓊脂」＝トコロテンは、美しくすべすべとして、こりこりとした固まり――ということかと、書きながら思い至ったのは、

春寒賜浴華清池
温泉水滑洗凝脂

「長恨歌」の一節、楊貴妃が華清池温泉で「凝脂」つまり、湯がはじけるような白く艶ややかな肌を洗っている光景である。

テングサは「和名抄」に凝海草と書かれているそうだから、清少納言は理屈っぽく蘊蓄を傾けながら、紫式部は楊貴妃の凝脂を想像しながら食べていたかもしれない。

なぜ、「瓊脂」を「心太（こころぶと）」と書くようになり、トコロテンと読むようになったかは、ちょっと分からないようだ。

このトコロテンを偶然凍らせてしまい、工夫を重ねて干物（ひもの）にしたのが伏見の美濃屋太郎左衛門、それに「寒天」と名づけたのが隠元、寒天と丹波の小豆で練羊羹を作ったのが駿河屋善右衛門だという。

寒天は摂津・丹波が一大産地となり、天保年間には二十万本も中国に輸出されるようになった。当然、その製法は業界の利権を持った「株」仲間の秘密であったが、巧みに盗みだし（修得して）、製法を公開して諏訪周辺を寒天王国にしたのが、茅野の小林粂左衛門である。諏訪は氷餅や凍豆腐（しみどうふ）（これも高野山から持ち込んだ？）の産地であり、作家の井出孫六は「このことに気づいたとき、これはいけるぞと、小林粂左衛門の体に武者ぶるいに似た興奮がかけぬけていったにちがいない」（「地域文化」八十二文化財団）と書いている。

原料のテングサは最良の伊豆産では足りず、日本海産が直江津からも和田峠越えで延々と諏訪へ運ばれた。

この寒天製造に携わる人を「天屋衆」と言ったそうだが、旧新井市の飯山街道沿いの知人から「親たちは〈天屋者〉と言って、冬になると諏訪へ出稼ぎに行ったものだ」と聞いたことがある。横道になるようだが、品川・大森、千葉県市原周辺に諏訪出身者が多いのは、働き口の無い冬場、諏訪を下りて海苔屋に出稼ぎ奉公する時代があったからだ（「山国からやってきた海苔商人」島利栄子著）という。

このようなことを「奇しくも」と言うのだろう、山国で「海草（かいそう）」に方便（たずき）を求める人びとの、それぞれの巡る思いが見えてくる。

ところで、そのせいかどうか寒天も心太も山の物と思っている人が少なくない。

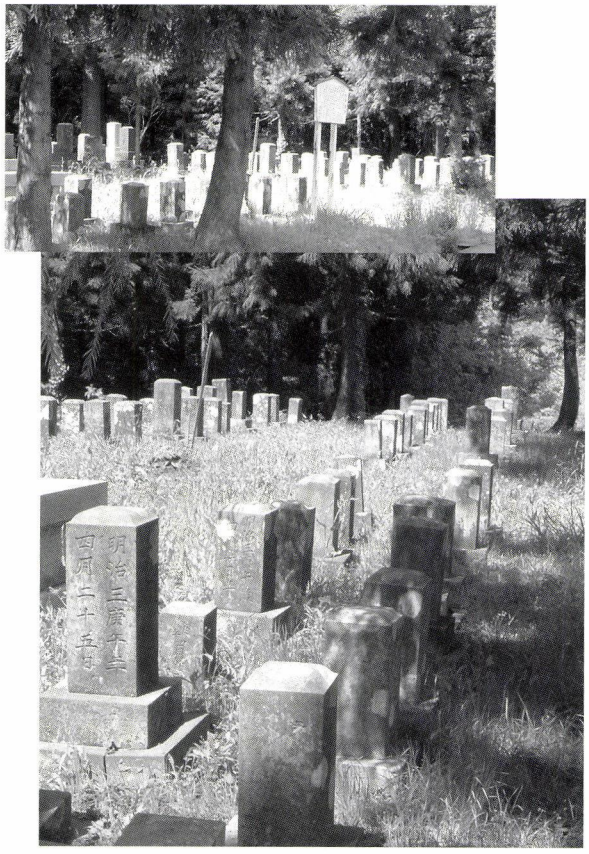
一尺の滝も涼しや心太　一茶

この句からも、うっかりしていると海の産物とはとても想像できない食べ物である。

（滑）

歴史の風景





右　会津墓地

眼科医田村真実は会津の人であったが、たまたま高田郡病院（県立中央病院）に勤務し、後に高田に眼科医を開業した人である。彼は、賊軍として異郷に無念の死を遂げた旧藩士の墓を見、一人墓地を守った。その遺志は子の堅幹（元・高田高校教諭）に引き継がれ、「管理者」として自力で説明の看板も立てている。

上　戊辰の役戦没者墓地

北越戊辰戦争の官軍の戦死者、西郷隆盛の弟なども祀られている。ひときわ大きい碑は、薩摩藩の慰霊碑。ここには上越市の説明看板が建っている。

会津墓地

通称山麓線の関根学園交差点を西、金谷山方向へ入ると「会津墓地」がある。

戊辰の役で賊軍となった会津藩は城地没収。藩士は「降人（降伏人）」として高田藩お預けとなり、第一陣が明治二年一月二一日到着した。その人数は『敗者の維新史』（星亮一著・中公新書）に拠れば、一七四五人にのぼった。

従来、一年半の間に六八名もの死者を出したため、藩財政悪化のなか降人を冷遇したと言われていた。しかし謹慎中の藩士の日記から、むしろ高田藩は手厚く遇していたことが分かってきた。荒川勝茂の日記には――一月二一日浄興寺到着。昼食は香の物、数の子、豆腐汁。入浴後、夕食は蒲鉾、昆布、煮しめ、イカ煮付などともに酒も出された――とある。

布団・下駄・箱膳が各自に支給され、謹慎所の寺々には自炊場や風呂が設けられて、病院も手配もされた。さらに一人五合の扶持米も支給されている。また茶会や、南摩綱紀（謹慎解除後も止まって、横曽根に「正心学舎」を開く）を中心に学問所が開かれ、そこでは高田藩士も学ぶなどの、行動の自由も与えられた。

高田藩は、これらの費用として一年間で四万七千両もの負担を強いられている。

明治三年四月謹慎が解かれ、再興とは名ばかりの「挙藩流罪」と言われ『ある明治人の記録――会津人柴五郎の遺書』に見る、下北半島斗南での苦闘の生活が始まる。

金谷山正面の「戊辰の役戦死者墓地」と、山陰の会津墓地を見比べるとき、今なお心痛む歴史の断面を思わざるを得ない。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

■編集室から■

上越地域の園芸作物を調べてみると、さまざまな試みが進められているにも関わらず、その内容についてほとんど知られていないことが分かる。その理由として、米作中心の上越地域では、園芸作物のほとんどが自家消費の延長にあるためではないかと思われた。

これらの園芸作物が〈上越（かみえちご）後ブランド〉として、各地へ出荷される日が近いことを期待したい。

■お知らせ

去る三月、上越なおえつ信金倶楽部総会において行われた、花ケ前盛明氏の「上杉謙信と直江津」と題する講演の抄録を掲載する予定でしたが、紙面の都合上掲載できませんでした。

第5巻3号　9月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」夏号
第五巻二号　通巻十八号
発行日／平成十七年六月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五（五四五）〇二一〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／（有）北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
FAX〇二五（五四三）二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十七年六月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)